

「沖縄の誇り」と知事選

辺野古反対の翁長氏圧勝と中日新聞 17 日 1 面は大きく伝えた。16 日に投開票された沖縄知事選は、米軍普天間飛行場の名護市辺野古への移設に反対する無所属新人の前那覇市長の翁長雄志氏が、移設手続きをすすめて 3 選を目指した無所属現職の仲井真弘多氏らを大差(10 万票差)で破り初当選した。写真右は当選を決め万歳する翁長氏、左は選挙で敗れて支持者の前で頭を下げる仲井真氏である。

昨年のいま頃(11 月 25 日)、自民党本部で沖縄選出の 5 人の国会議員が、辺野古移設を容認した。石破幹事長(当時)との会談後、頭を下げて会談に同席した写真が印象に残る。本土(政府自民党)に沖縄が屈するような様子が大きく報じられた。そして 12 月、政府は 3400 億円の振興予算を確保し、仲井真知事は「有史以来の予算。いい正月になる」と笑い、2 日後に埋め立てを承認した。



毎日新聞 20 日「記者の目」で那覇支局の佐藤敬一記者は今回の知事選は「沖縄の誇りかけた戦い」と述べる。保革の壁越え声あげた県民、「カネで懐柔」もう通用せず、という言葉に今回の知事選がよく示されている。翁長氏は選挙戦で「沖縄の人間をバカにしてはいけない」と訴えた。この知事選は「沖縄の誇り」をかけた戦いであったのだ。

朝日新聞の松川敦志那覇総局長の「敗れたのは誰なのか」という問いかけも心に残る(17 日 1 面)。普天間問題で国にはかつて、沖縄の声に耳を傾けようという一定の配慮がまだしもあった。問答無用の強行を避けてきたからこそ、日米が返還に合意してからの 18 年にわたる混迷だったともいえる。今はどうだ。反対運動が続き、移設問題を争点とする知事選が控えているにもかかわらず、「過去の問題」(菅官房長官)と言い放つ政権。これに対する批判がさして広がらない本土世論。「いい正月」の向こうに県民は、「差別」の 2 文字を見て取っている。琉球大の比屋根名誉教授は投票前、「沖縄が本土に対し、どの程度の親近感を持っているのかが示される選挙」と見立てていた。そして、この結果だ。沖縄に押しつけ、沖縄を切り捨て、沖縄を忘れる。私たちの政府、そして本土が、敗れたのである。

知事選の結果など関係ないかのように、辺野古の作業が再開された。そして、総選挙に突入する。本土に住む一人として、せめて「沖縄の誇り」だけは忘れないでいたい。

(2014 年 11 月 21 日)